# 桐一葉（きりひとは）

池松　孝子

夏の終わりから秋の初めにかけて風もないのにあの大きな桐の葉が、カラカラと音を立てて落ちてくる。それも持てる力すべてを使い切ったかのように落下するのだ。桐は他の木に比べて早くから葉を落とすことから「桐一葉」は早い秋の訪れをいう。

「桐一葉」の起源は中国である。成立は紀元前１４０年頃とされる、中国の諸子の思想書『淮南子（えなんじ）』に「梧桐（あおぎり）の一葉が落ちて天下の秋を知らせる」とある。「桐一葉」はこれから出たとされ、繁栄してきた国家の衰退を予兆することを言い表わすようになった。よって「天下の秋」はいわゆる季節の秋ではない。桐の葉の落下という小さな兆しをもってこれまで栄えたものが凋落していく、些細な事象から次を予見するのだ。隆盛を極めた国家の秋をいう。つまり国家の衰亡がここに迫っていることを象徴的にいう。

坪内逍遥の戯曲に『桐一葉』があり、歌舞伎の演目になっている。これは豊臣家の忠臣、片桐且元の苦悩を描いたもの。関ケ原の戦い直後の豊臣家の混乱、衰退と滅亡をテーマに描いたもので、関ケ原の合戦の後の大阪が舞台だ。

かつて連歌などでは桐以外の植物にも使われたようだが、現在では、俳句の季語として使われることが多く、「一葉」というと桐の葉のことを指す。よって桐以外の場合はその植物の名を詠みこむが、音（おん）の関係からか「桐一葉」とすることが多い。俳句でも短歌でも深い詠みこみ、感じ取りを要求し、秋のはじまりの情緒を詠む、我が国独特の風情といえよう。

数ある「桐一葉」を詠んだ句の中でも私の挙げたい句がある。

桐一葉日当たりながら落ちにけり　　高浜　虚子

残暑の日差しを受けてひらひらと落ちる桐の葉は色、空気、時間までも訴えてくる。

桐の葉が落ちるという小さな兆しから、栄えたものが凋落していくことを察し、この先の大きな変化が起こるのを予見するのも面白い。また、桐一葉の落ちるのを見て来たる秋の寂寥を詠むのも面白い。